

西山俊彦 著

『カトリック教会と奴隷貿易』

—現代資本主義の興隆に関連して—

サンパウロ（2005年9月14日初版、2006年3月1日第二版 刊行）



阿部 仲麻呂（日本カトリック神学会評議員、サレジオ修道会司祭）

想像してほしい。あなたが、ある日、突然、拉致されて異国に連行され、強制労働を強いられる。暖かな家庭生活も人権も生きがいも、一方的に奪われる。ひたすら働かされて捨てられる…。実に、この残酷な状況は五百年前から始まっている。奴隷にされた人の気持ち、人買いの気持ち。あなたは、どう思うか。



今、日本人は快適な毎日を過ごしている。しかし、その陰には、多くの方々の犠牲があった。東南アジア地域から資源を搾取した結果、日本の産業が発展した。日本の経済システムは、西欧の近代資本主義の影響を受けている。そして、西欧近代資本主義の成立に奴隷の労働が決定的な役割を果たした。多くの犠牲者によって支えられている先進国。今、快適に生きている私も加害者。

本書は、ヨーロッパ近代の奴隷貿易の始まりにカトリック教会の組織的な関与があったことを直視する。暗い過去を直視することは、痛みを伴う。しかし、現在まで続く途上諸国の身分差別や貧富の差を解決するには、事の発端をありのままに理解しておくべきだろう。本書の刊行は勇気ある英断。著者は司祭としてカトリック教会を大切に想うあまり、逃げることなく、誠実に真実と向き合った。イエスを見殺しにしたペトロが自らの愚かさに気づいたときに激しく泣いて、自分の弱さを認め、そこから教会共同体が始まったのと同様、今、私が歴史上の愚行を直視して反省しないかぎり真の教会共同体は始まらない。

地球全土の聖俗両権を強調した教皇アレクサンダー六世の「贈与大勅書」（1493）を拡大解釈することによって、特定の王家が新たに発見した土地を植民地化し、従わない者を奴隷として酷使することが決定づけられた。南米やアフリカの人々を悲惨な境遇に追い込んだ原点を徹底的に反省し、その影響に関しても統計データも加えて解説したのが本書である。「キリストの御名を戴く教会の組織的な罪」を「個々の信徒の罪」（私的罪過）にすり替えて謝罪することを欺瞞だとして糾弾し「教会の罪」として見直しを迫るのも、捨てられた犠牲者たちへの深い愛情のゆえである。虐げられた者を解放したイエスの視点を取り戻すためにも、必読の書である。